

城下町と魚市場 町人文化の 名残を見せるエリア

魚町通りは一本通行のため、259号線から通りに入ることでできない。そのため通行に利用する人こそ少ないが、サンヨネ本店をはじめ、地元の良いお客が大きな荷物を持って行き交う姿に、市場的な活気を感じる商店街だ。

若い世代にとっては、なぜ街中で「魚町」なのか、不思議に思う人もいるかもしれない。サン

ヨネ本店の裏手に、安海熊野宮がひっそりと鎮座している。この地はその昔、漁船の安全を祈禱し、口銭の一部を社殿修復に充てることを条件に片浜十三里(伊良湖岬、浜名湖の今切れ口まで約52kmにわたる砂浜)で獲れた魚の売買が許され、豊橋における魚市場発祥の地となった。戦国時代末期には境内で魚の売買が始まり、江戸時代には名古屋をも凌ぐ賑わいを見せ、明治以降もますます発展。昭和41年に魚市場が下五井町に移転したことから、魚町の景観も大きく変わったが、いまでも市内の魚関連の加工業者や魚屋には、魚町にゆかりがある人々が多い。

魚町通りに続き、松葉公園まで至るのが新本町商店街だ。魚屋さんが経営する居酒屋、呉服店、昭和レトロな雰囲気ドラッグストアやクリーニング店など、歩いてみるとなかなか奥深い。新しいショップが建ち並ぶ駅前とは、一味違う滋味を楽しみたい。

豊橋名産ちくわ

豊橋名産として知られるヤマサちくわ本店もこの地にある。創業は文政10年(1827) 創業者である佐藤善作が金毘羅参りに出かけた際、その地で名物として売られていたちくわの味に感動し、帰郷してすぐにちくわ作りを始めたという。三河湾は魚種が豊富でちくわ作りに適しており、保存の効く塩漬けちくわを開発したことで、海の幸に乏しい信州方面へも市場を広げることに成功した。

魚町の鎮守、安海熊野宮

社伝によれば、保延2年(1136)の創建で、漁船の安全祈願を条件に、境内では一帯の豊富な魚介の売買を独占販売することが許されていた。そのため、一帯の海産物が集荷される拠点として発展し、戦前は広大な敷地を持っていたが、戦後の区画整理によって大幅に敷地を縮小した。ここには日本でも有数といわれる能楽のコレクションが保管されている。

豊橋市魚町115 問合せ／0532-54-1484 (豊橋観光コンベンション協会) 境内は参拝自由

アーケード撤去

花園商店街のアーケード撤去に続き、今年2月末までに、魚町通り商店街もアーケードの撤去工事が終了し、青空商店街へと変貌を遂げた。昭和期のアーケード街は当時としては斬新だったが、歳月の経過による改修費がかさむほか、光を遮ることで「暗い」イメージを持たれるようになり、最近では全国的に撤去が進んでいる。



新本町と祇園八か町

新本町が生まれたのは昭和33年(1958)のこと。その3年前、豊橋市は旧二川町や旧前芝村、旧高豊村など、1町4村の全域と2村の一部が編入したことで、市内では住居表示や区画整理が進み、新しい町名が次々設置された。「新本町」は、本町、指笠町、三浦町、魚町、萱町、花園町のすべてまたは一部を統合して誕生した。このうち本町、指笠町、三浦町は、吉田神社の氏子八か町として、祇園祭を担ってきた歴史を持つ。新本町として半世紀以上の歴史を歩みつつも、祇園祭の際には、いまでも旧町名を背負って神輿渡御や手筒花火の奉納を行っている。

輪くぐり神社

新本町商店街の路地を入ったところに、輪くぐり神社(素戔鳴神社)がある。ここは吉田神社祇園祭の御旅所であり、吉田神社を出た神輿渡御は、町内を巡りながら、一旦この輪くぐり神社で祝詞をあげ、札木、西八町を回って吉田神社へと戻っていく。祇園祭後の7月31日には、夕刻から夜にかけてユニークな「輪くぐり神事」が行われることでも知られる。茅で作られた大きな輪をくぐることで、病氣や穢れを払うことができるといわれる。夏病み除けに、夏越しの祓(はらえ)として、6月に行うお宮が多いが、ここでは7月末が通例となっている。

魚町と能楽

明治7年、魚町の商人、小久保彦十郎たちが、旧藩主である大河内松平家から能面及び装束、小物一式を有償で譲り受けた。その後明治17年に能楽殿が新築され、町民の間で能狂言が盛んになったとされる。これらは市や県の指定文化財となっており、魚町が所有し、安海熊野宮に保管されている。昭和20年の豊橋空襲の際には、町民総出で蔵を守り、市中が全焼する中、貴重なコレクションは奇跡的に焼け残った。年2回、虫干しを兼ねて能狂言の面コレクションが一般公開される。

〇2015年の定例虫干し
日時/4月26日(日)、10月18日(日) 9:30~15:00
※観覧には管理協力金500円が必要 場所/安海熊野宮
問合せ/TEL.0532-52-4116(魚町能楽保存会/濱金商店)